

## ■ 第7章 注釈 「共同体の音楽」としての映画音楽

<sup>1</sup> Julia Smith, *Aaron Copland : His Work and Contribution to American Music*, p.199.

<sup>2</sup> *C&PI*, p.254.

<sup>3</sup> 同種の作品として、1940年、CBS放送 から同様の趣旨で委嘱されブルース・バラードの《ジョン・ヘンリー》(John Henry, 1940) のオーケストラ・アレンジを残している。この曲はコープランドにおいて、唯一黒人文化と関連する作品である。

<sup>4</sup> *C&PI*, p.237.

<sup>5</sup> Leo Smit, ed., *Aaron Copland Piano Album*, ([United State] : Boosey & Hawkes, 1981), pp.27-31.

<sup>6</sup> *ECAC.*, p.77. そしてまた、「ヘンリー・ストリートは、かつて『ロシア革命のアメリカの家』と描写された」と、クライストは述べる。

<sup>7</sup> クライストによれば、委嘱は、同セツルメンハウスの附属音楽学校のディレクター、グレース・スポフォード (Grace Spofford) という女性によるものである (*ECMC.*, p.77)。

<sup>8</sup> *C&PI*, p.192.

<sup>9</sup> *ECMC.*, p.76-86.

<sup>10</sup> 「ブードゥー」については以下を参照のこと。畑中佳樹「ブルースとブードゥーの悪魔」、飯野友幸編著『ブルースに囚われて：アメリカのルーツ音楽を探る』東京：信山社、2002年、13～28頁。

<sup>11</sup> 亀井俊介「アメリカ映画とアメリカ文化」、ロバート・スクラー『アメリカ映画の文化史 (上)』、3頁。

<sup>12</sup> ロバート・スクラー『アメリカ映画の文化史 (上)』、52頁。

<sup>13</sup> 加藤幹郎『映画館と観客の文化史』東京：中公新書、2006年、76～84頁。なお、新書ではあるが、この著作には要所に注釈がつけられており出典が示されている。また関連分野の論文で多く引用される著作である。

<sup>14</sup> Roy M. Prendergast, *Film Music : a Neglected Art*, p.35.

<sup>15</sup> Theodor Adorno, Hanns Eisler, *Composing for the Films*, (first ed., New York, 1947) this ed., London : Atholone Press, 1994, p.75; 竹峰義和『アドルノ、複製技術へのまなざし：〈知覚〉のアクチュアリティ』東京：青弓社、2007年、182頁。

- 16 アドルノが「今日の機能」(1965)で示した、難解なる「ミメーシス衝動」の概念については、たとえば、以下の論考が、その理解の手がかりとなってくれる。龍村あや子「グローバル化時代のアドルノ理論——〈音楽と自然〉の問題を中心に」、徳永恂編『アドルノ批判のプリズム』東京：平凡社、2003年。
- 17 ロバート・スクラー『アメリカ映画の文化史(上)』、103～112頁。
- 18 Kathryn Kalinak, *Settling the Score : Music and the Classical Hollywood Film*, (Madison, Wisconsin : The University of Wisconsin Press, 1992), p.79 ; Claudia Gorbman, *Unheard Melodies.*, p.73 (“Classical Film Music : Principles of Composition , Mixing , and Editing”) ; David Bordwell, Janet Staiger, Kristin Thompson, *The Classical Hollywood Cinema : Film Style & Mode of Production to 1960*, (London : Routledge, 1985).pp. 33-35. 石井拓洋「アーロン・コープランドの映画音楽『我等の町』の音楽語法における古典的ハリウッド映画期の典型との〈差異〉の量と質の存在証明」、修士論文、東京学芸大学、2012年、21～76頁(カリナクやゴルブマンらの指摘した様式のさらなる考察を通して、結果、筆者のいう「変転するライトモチーフ」にこそ、当時の映画音楽様式をもっとも特徴づけられるとの主張がある)。
- 19 Roy Pickard, *The Hollywood Studios*, (London : Frederick Muller Limited, 1978) p.140 (“Write music like Wagner, only louder”) ; David Bordwell, Janet Staiger, Kristin Thompson, *The Classical Hollywood Cinema : Film Style & Mode of Production to 1960*, p.34.
- 20 Erno Rapee, *Encyclopedia of Music for Pictures*, (First ed., New York : Belwin Inc. , 1925) this reprint ed., New York : Arno Press Inc., 1970, p.8.
- 21 早崎隆志『コルンゴルトとその時代：“現代”に翻弄された天才作曲家』東京：みすず書房、1998年。
- 22 蓮實重彦『映画はいかにして死ぬか：横断的映画史の試み』東京：フィルムアート社、1985年、96～136頁。
- 23 *GJAC.*, p.56(邦訳、64頁)。
- 24 笠原美智子編「作家解説」、『アルフレッド・スティーグリッツとその仲間たち』[展覧会カタログ、1997年9月9日～11月3日、東京都写真美術館、東京都写真美術館、朝日新聞社編、東京：東京都写真美術館、1997年、179頁。
- 25 Harold Clurman, *All People are Famous*, (New York : Harcourt Brace Javanovich ,1974) pp.89-90.
- 26 David Bardwell, *The Cinema of Eisenstein*, (London : Harvard University Press, 1993) pp.19-21.
- 27 ポラックの研究書(本論略記 HPAC, ペーパーバック版)の表紙写真は、このスタイナーによって1933年に撮影された作品、『アーロン・コープランドの肖像』である。写真の存在からも伺えるように、この時期、スタイナーとコープランドとの親交は近いものであり、彼らのうちで映画の議論が多くなされていたことは想像に固くない。
- 28 *C&P II.*, p.182.
- 29 *C&P I.*, p.270.
- 30 「1930年代から40年代における、典型的ハリウッドスタジオ内での音楽部門のための組織図」が、以下のハリウッド映画音楽史の基本資料のなかを示されている。その階層的組織図の頂点に“General Musical

Director” とある。 Roy M. Prendergast, *Film Music : a Neglected Art*, p.38.

<sup>31</sup> *C&PI*, p.270.

<sup>32</sup> 菅見有弘『ハリウッド・ビジネスの内幕：映像ソフト王国の全貌』東京：日本経済新聞社、1991年、124頁。

<sup>33</sup> 亀井俊介「ハリウッド、ハリウッド」、『サーカスが来た！：アメリカ大衆文化覚書』東京：平凡社、2013（初版、東京：東京大学出版会、1976年）、290頁。

<sup>34</sup> Sally Bick, “Of Mice and Men : Copland, Hollywood, and American Musical Modernism,” *American Music*, vol. 23, no.4 (Winter, 2005) p.427; また、“Hollywood’s norms”の語は、ボードウェルの以下にも看取される。David Bordwell, Janet Staiger, Kristin Thompson, *The Classical Hollywood Cinema : Film Style & Mode of Production to 1960*, p. 5.

<sup>35</sup> *C&PI*, p.271.

<sup>36</sup> 1937年当時、たとえば、アメリカの「州・地方自治体」職員の年間所得は1,441ドルであった。一方、日本の現在の労働者平均年収を仮に400万円として概算した。アメリカの年間所得は以下の統計に拠った。「D739-764. 産業別常勤雇用者年間平均所得：1900-1970年」、『アメリカ歴史統計』第1巻、アメリカ合衆国商務省編、斉藤真、鳥居泰彦監訳、東京：原書房、1986年、166～167頁。

<sup>37</sup> オットー・フリードリック『ハリウッド帝国の興亡：夢工場の1940年代』柴田京子訳、東京：文芸春秋社、1986年=1994年、57頁。

<sup>38</sup> オットー・フリードリック『ハリウッド帝国の興亡：夢工場の1940年代』柴田京子訳、東京：文芸春秋社、1986年=1994年。

<sup>39</sup> *HPAC*, p.379.

<sup>40</sup> 早崎隆志『コルンゴルトとその時代：“現代”に翻弄された天才作曲家』、165頁。

<sup>41</sup> Aaron Copland, “Second Thoughts on Hollywood,” *Modern Music*, vol.17. no.3 (March-April, 1940), pp.141-147; また、のちに以下の単行本にも収録された。Aaron Copland, “Music in the Film,” *Our New Music*, pp.260-275 (邦訳「映画音楽」、『現代音楽入門』塚谷訳、198～208頁。ただし訳出では省略が多くみられる。とくに、政治に関わる部分に顕著である。1957年出版。).

<sup>42</sup> Aaron Copland, “Second Thoughts on Hollywood,” p.143 (邦訳、202頁。).

<sup>43</sup> *Ibid.*, (邦訳、同前).

<sup>44</sup> たとえば、以下があげられる。柳生すみまろ『映画音楽：その歴史と作曲家』東京：芳賀書店、1985年、104頁。早崎隆志『コルンゴルトとその時代』、222頁。

- 45 本論は「言説」を、社会的権力をともなった主張の意味で使用する。
- 46 本論での「神話」の語の含意は、本論第2章の注釈28を参照のこと。
- 47 池内友次郎、長谷川良夫、石桁真礼生ら『和声：理論と実習・I』東京：音楽之友社、1991年（初版：東京：音楽之友社、1964年）、13頁。
- 48 ロバート・スクラー『アメリカ映画の文化史（上）』、30頁。
- 49 同前、スクラー（上）、53頁。
- 50 同前、スクラー（上）、110頁。
- 51 御園生涼子『映画と国民国家：1930年代松竹メロドラマ映画』東京：東京大学出版会、2012年、3頁。
- 52 亀井俊介「ハリウッド、ハリウッド」、『サーカスが来た！：アメリカ大衆文化覚書』、283頁。
- 53 同前、亀井、293～294頁。
- 54 テオドール・W・アドルノ『ミニマ・モラリア：傷ついた生活裡の省察』三光長治訳、東京：法政大学出版局、1951年=1979年、18～19頁。
- 55 Kathryn Kalinak, *Settling the Score Music*, p.102.
- 56 カリル・フリン『フェミニズムと映画音楽：ジェンダー・ノスタルジア・ユートピア』鈴木圭介訳、東京：平凡社、1992年=1994年。
- 57 Aaron Copland, “Second Thoughts on Hollywood”, p.143 (邦訳、202頁。).

## ■ 第8章 注釈 不協和音の由縁：ドキュメンタリー映画『都市』の映画音楽について

<sup>1</sup> Theodor Adorno, Hanns Eisler, *Composing for the Films*, (1st ed., New York: Oxford University Press, 1947), This ed. New York: The Athlon Press, 1994, p.130.